

村上地域における「あきだわら」の多収穫栽培ごよみ

品種の特徴

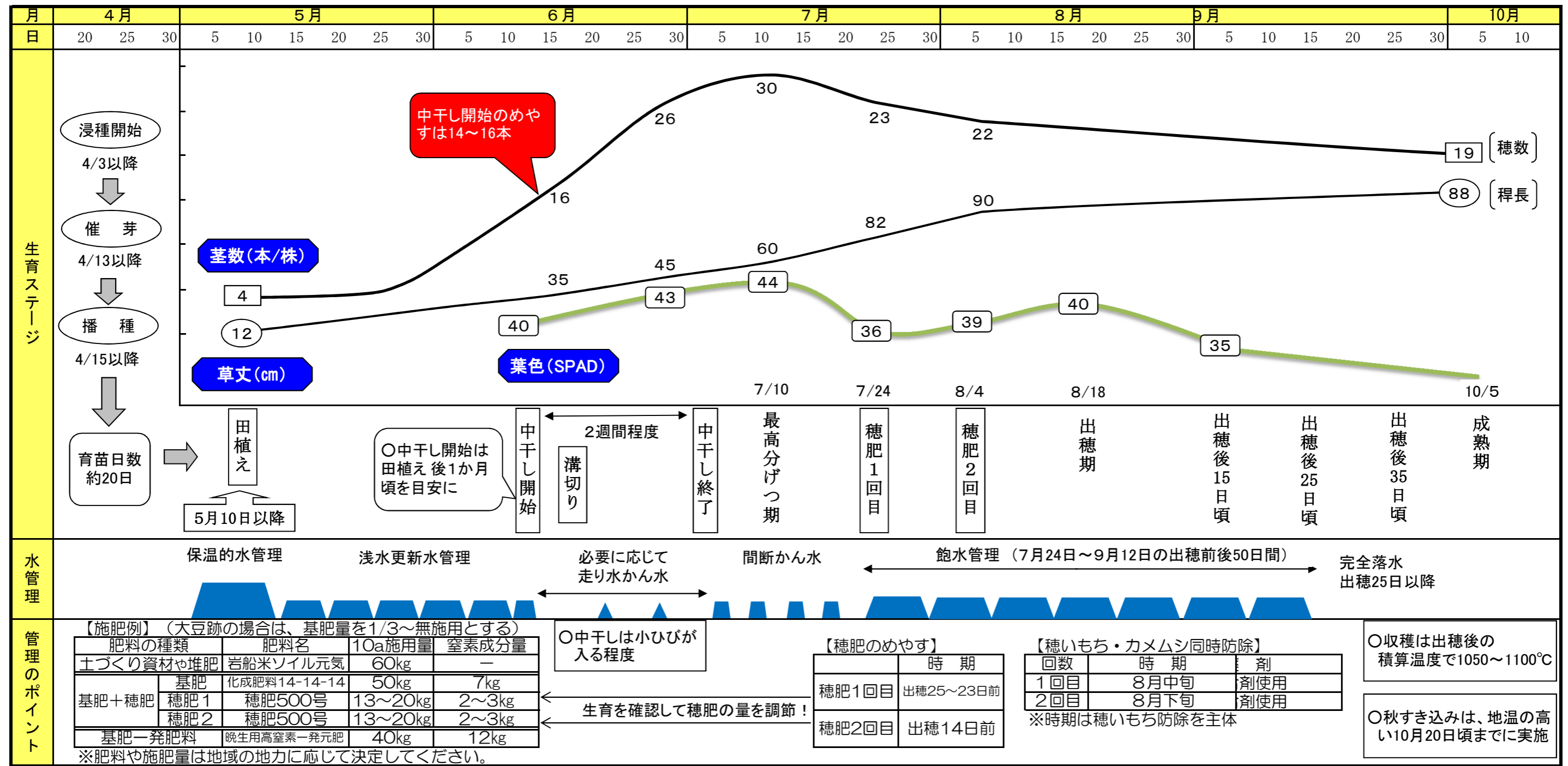
- 出穂期は「コシヒカリ」に比べ8日程度、成熟期は11日程度遅い晩生のうるち種
- 耐倒伏性はやや強
- 耐穂発芽性はやや難
- 障害性耐冷性は弱

栽培のポイント

- (1) 健苗育成 : ①育苗日数は20日程度(加温20日、無加温25日) ②播種は4月15日以降、播種量は乾籾150g/箱 ③5月10日~20日頃の移植
- (2) 過剰生育防止 : ①1株苗数3~4本植えとし、茎質向上 ②栽植密度は茎数確保のため60株/坪(大豆跡は50株/坪) ③基肥窒素量は7~8kg/10a程度(大豆跡は1/3~無施用) ④中干し・溝切りを徹底し、根の健全化と茎質向上
- (3) 登熟向上 : ①1回目の穂肥時期が幼穂形成期であるため、幼穂確認と遅れない穂肥 ②出穂前後25日間は飽水管理とし、田面を乾かさず地力窒素の発現を促進 ③落水は出穂25日以降とし、登熟向上
- (4) 病害虫防除 : ①いもち病の箱処理剤による予防防除 ②いもち病とカメムシ類の同時防除 ③紋枯病の発生に応じた適切な防除
- (5) 胴割れ発生防止 : ①刈り遅れしない適期収穫 ②刈取水分に応じて乾燥温度を調節
- (6) 土づくり : ①稲わらの秋すき込み ②土づくり肥料や堆肥等有機物の施用

目標の収量構成と品質	
目標収量	720kg/10a
穂数	330~350本/m ²
1穂籾数	102~110粒
m ² 当り籾数	36,000粒
登熟歩合	90%
千粒重	22.2g
検査等級	全量1等
玄米タンパク質	6.5%

基本は「適正生育量の確保」と「登熟の良い稲づくり」



【施肥例】(大豆跡の場合は、基肥量を1/3~無施用とする)

肥料の種類	肥料名	10a施用量	窒素成分量
土づくり資材や堆肥	岩船米ソイル元気	60kg	-
基肥+穂肥	基肥 化成肥料14-14-14	50kg	7kg
	穂肥1 穂肥500号	13~20kg	2~3kg
	穂肥2 穂肥500号	13~20kg	2~3kg
基肥一発肥料	晩生用高窒素一発元肥	40kg	12kg

※肥料や施肥量は地域の地力に応じて決定してください。

○中干しは小ひびが入る程度

生育を確認して穂肥の量を調節!

【穂肥のめやす】

回数	時期
穂肥1回目	出穂25~23日前
穂肥2回目	出穂14日前

【穂いもち・カメムシ同時防除】

回数	時期	剤
1回目	8月中旬	剤使用
2回目	8月下旬	剤使用

※時期は穂いもち防除を主体

○収穫は出穂後の積算温度で1050~1100℃

○秋すき込みは、地温の高い10月20日頃までに実施